

# 吹くはなに風

—— 語彙の種々相 ——

山内 洋一郎

一

きのふからけふまで、吹くはなに風

恋風ならば、しなやかに

なびげや、なびかでかぜに揉もまれな

落さじ、桔梗のそらの露をば

しなやかにふくこひかぜが身にしむ

田植草紙 朝歌二番(注)

室町時代の安芸地方の田植で、早乙女は朝の労働に、このような唄を歌って、自らを元気づけ、また疲れをも癒やすのであった。

「恋風」とは誠にうまい造語で、民衆の巧まぬ智慧を感じる。親しく願わしい人からの情熱の働きかけを、乙女たちは期待をこめて歌ったであろうし、昨日から今日までの名残りの気分でもあっただろうか。そして、「なびく」「揉まる」「落す」「身にしむ」と、恋のさまに付かず離れずの

ことばが微妙な雰囲気をつくり、全体のトーンは「しなやかに」なのであった。

「恋風」は歌謡のことばとして始まったものか、

恋風がきては、袂にかいもとれてなう、袖の重さよ。

恋風はおもひ物哉。

閑吟集 七二

これは狂言の枕物狂でも用いられ、祖父おぢの少女への一目惚れに合せて謡われる。それで見ると、この恋風は、自らの内から萌もして、身にまわりついて離れなくする、そのことを指している。もとより古代の恋は肉体的面が強く、共寝をした心でもあったから、日葡辞書に「Cocete」を「したわしき、すなわち肉体にかかわる愛」（邦訳による）と説明しているのは当然であった。歌語でも文章語でもないから、この辞書（一六〇三年、長崎版）にしばしばあるその指示がないが、さりとて、俗語とも言つてなく、人の普通に通うことばになつていたのであるか。ともかく『閑吟

集』より古い例は見つかっていない。

二一

「風」は自然現象として人とは無関係に存在することであるが、日々の人の生活の身边現象として、誠に親しいことでもある。嵐の風の脅威もあれば、「扇の風」という自ら起こすさやかな風もあり、人は「風」という語に心を寄せ、意味をふくらませ、複合語も豊かに作ってきた。「一風」という複合語を知るのに恰好な資料がある。即ち、連歌賦物集である。南北朝頃にできたと思われる野坂本賦物集の「何風」を見てみよう。

何風 百七十五  
伊可保方 家同 板間 池浦 磯松 壹岐松  
春方 濱同 泊瀬 早美濱 花 萩ノ下 萩ノ下  
初羽 堀川院百首 花下 初潮 萩ノ下 (以下略)

上古、日本武尊の筑波山での片歌の唱和に始まるとする連歌は、中古の即興的唱和形式の短連歌から、中世に入つて鎖連歌、長連歌になつていた。それは賦物をとるものであつて、例えば、「何風」と定めると、その連歌は発句から各句それぞれにこの「何」に当たる語を詠みこむ約束であつた。これは大変な約束で、難題を課することになると共

に、完成の喜びも大きかつたであろう。百韻では少くとも百種の語彙を用意する必要があつたので、賦物集の編纂が必要になつたようである。だが、賦物は発句のみに関係する形式的なものになると、その需要もなくなり、いつしか賦物集の伝存も稀になる。広島県の厳島神社野坂家に伝存するこの一帖(題簽「うたつる」)は賦物集の最古の貴重な遺品としてよく知られている。

「何風」を見ると、それに「風」を付けて、次のような語があつたことを示している。

伊可保風 家風 板間風 池の浦風 磯の松風 壹岐の松風 春風 浜風 泊瀬風 早み浜風 花風 春の夕風 春の初風 羽風 花の下風 初潮風 萩の下風

語を収集したときの出典名が記されることがあつて、書名は八十八種もあつて、中には散佚書もあり、収集努力の多大であつたことがわかる。「万」はもちろん万葉集で、

伊香保可是吹く日吹かぬ日ありといへど我が恋のみし  
時なかりけり 卷十四 三四二二、上野国歌  
伊倍加是は日に日に吹けど我妹子が家言持ちて来る人  
もなし

卷二十 四三三三、上総国防人歌  
わずか一例しかない言葉を抜き出している。次の「板間」は、

「板間風」が見当らないので、「板間の風」を指すのであろう。

前大納言公任、長谷にすみ侍りけるころ、風はげしかりける夜のあしたに、つかはしける 中納言定頼

故里のいたまのかぜにねざめして谷の風をおもひこそやれ

千載集 卷十七 一〇九八

他の「一風」を一見しただけで、その殆どが和歌表現であるとわかる。「花風」は今の『枕草子』には見当らない。「早美濱」は、『万葉集』巻一、七三の長皇子の歌であろう。

吾妹子を早見浜風大和なる吾をまつ椿吹かざるなゆめ

これは「吾妹子を早見(む)」という流れと、「早み浜風」というミ語法の連体法の例(早い浜風)とを重ねた表現で、これも集中に唯一の例である。

このような考証を二々に施してゆくことは、この書の理解としては必要なことだけでも、ここでは筆を先へ進めたい。「何風」の百七十五種もの収集語の大部分はこのように和歌に出てくるものであったが、中には散文の文献名を書いているものもある。

迹ニケ 弁内侍日記 東 大和物語  
アヲマ 日本紀 乱 玉精日記

「弁内侍日記」の「逃風」ははつきりしないが、『大和物語』には「こちかぜ」があり、「こち」のみで東風をいうとは定まっていないことがわかる。『日本書紀』景行天皇

四十年の「暴風」を「アラシマカゼ」と古訓によむことは辞典の伝えるところ、『玉精日記』(かげろふ日記)の今の校訂本では「みだりかぜ」(下、天延二年五月)として出る語があり、これは、病氣としての「風」(風邪)である。

このような散文用語には、古訓として残る上代語もあれば、中古の語もある。だが、中世——この資料では鎌倉から南北朝——の語は全くないのかというと、そうではないらしい。

壺 壺 壺

この注付きの「壺風」という語は、他に例もなく、今までの辞書に登載されていない、珍奇なといって良いことばである。中世の世俗語かと思われるものを「風」を付けて挙げてみよう。

丙風 辻子風 向風 馬風 産風 藪風 箭風  
舟風 手風 寒風 湯風 道風

「丙風」とはどんな風なのだろうか。「丙」をカラとよむのは、本書では「木丙(何目)」「比丙(何目)」があつて、後者は今日のひんがら目の最古例と思われるが、ともかく

「丙」と訓める理由はわからない。「カラ風」なら「上州名物からつ風」を誰しも思うだろう。辞書での短い引用ではよくわからないが、『甲陽軍鑑』本篇卷十一の左の文はまさにこれであった。武田信玄は北条氏康と共に上杉輝虎の居城、前橋を攻めた。時は旧暦十月六日である。

其の日にかぎり、から風いたくふぎ、とね川を渡るに、  
北条・武田の諸人目口もあかず、東西さらにわきまへず候

「から風」を「水分の少い」という気持で「空風」と書くことが多いようだが、上代語の「枯樹」「枯山」からの続きとして見れば「木枯し」と似た発想の語で、「枯風」がよく、せめて「乾風」と書くのではなからうか。

「飄風」は中古に既にあるが、和歌世界の語ではなく、「辻子」と「子」を添えるのは中世のものである。「手風」は『曾丹集』に

ま白なるおきの眉かき見るときぞ妹がてかぜはいとど  
恋しき

とあり、野坂本賦物集の取材源の一つに『曾丹集』もある  
ので、これが源かもしれないが、それだとしても曾祢好忠  
が当時の歌壇にあき足らず工夫した素材・語彙の新風の一  
つと見てよいものだろう。

「馬風」「産風」「湯風」などは、その具体的風の姿が浮  
んでこないもので、他に例を知らない。

「何風」は「朝何」「初何」などと共に、賦物集の中では  
最も和歌世界に近いものであるが、その中に右のような世  
俗の語も取り入れているところが、大変おもしろい。そし  
て、和歌世界とは断絶する「何取」「何所」なども含まれ  
ている。

### 三

賦物集は一往は連歌創作のための書であるが、例えば、  
「何風」と賦物を定めても、その「何」に当たる語を用い  
るのであって、その百韻の各句に「風」が登場するのでは  
ない。それで、中世で最も隆盛であった韻文の連歌につい  
て、「風」がどう使われているかをすこしばかり見てみよう。  
物語でも日記でも、歌集でも何でも、一つの言語資料  
の中で、どういう語が最も多く使われているか、出現頻度  
が高い語はどういうものがあるかは大変興味深いものであ  
る。『源氏物語』では

こと。あり。いと。人。心。なし。す。おもふ。もの。  
おぼす。みる。ほど。きこゆ。この。

という順になっいて、散文として必要な動詞や形式名詞

などがある中に、敬語「おぼす」「きこゆ」と副詞「いと」に平安女流文学らしさが感じられるが、素材を示すものとしては、二十一位に「宮」がやつと顔を出す。和歌ではこれとは異なり、素材が表に出ている。

『古今集』で「風」はさほど重要な素材でなく、二十七位であるが、『新古今集』では十七位、連歌の勅撰集『新撰菟玖波集』では十一位にもなっている。千句連歌の統計をとっても同じ順位である。

「風」は連歌では極めて重視された素材といつてよく、和歌では『新古今集』に近い。別の観点から見ると、日本の韻文素材の変遷としては「風」がだんだんと重視されるようになったわけで、「月」も似た傾向をたどっている。「風」の連歌という点、まず宗祇独吟『三島千句』第一の発句が想い起こされる。

なべて世の風をおさめよ神の春  
花も手向のゆふかくるころ

この句を『時代別国語大辞典(室町時代編)』の「かぜ」に「世の中を乱すものをたとえていう」という意義説明の下に載せている。この句は宗祇が文明三年春に伊豆の三嶋神社で、風邪平癒祈念として奉納したものであること、奥書で明らかであり、桜花の風に散るを惜しむ心もあり、採録は慎重にと編集時に提言したのであったが、そのまま載っている。

順位	新撰菟玖波集	新古今集	古今集
1	月	日	人
2	花	人	有
3	人	見	思
4	身	有	見
5	秋	思	な
6	見	な	花
7	心	秋	わ
8	な	す	が
9	山	袖	す
10	憂	花	も
11	風	身	心
12	知	露	秋
13	思	心	鳴
14	ふ	春	く
15	春	空	山
16	夜	わ	来
17	世	が	知
18	露	風	る
19	有	世	君
20	空	待	わ
	袖	つ	れ
		夜	身
			な
			る
			春

古注にも世の平和祈願の意味は記されていない。いかにもそのように見えるけれども。

見渡せば野べに霞のむら消て  
風おさまれる春はこの春

興俊 河越千句、第六 揚句

この「風」もその一句のみではその意味にとれるが、はたしてどうか。韻文の含意は微妙なことである。連歌の「風」について、詳しくは多様性を見ることができ、印象としてはまともな自然の風を歌い、「家の風」という漢語の和化表現くらいがちよっと変わったものである。

「恋風」のような造語は、庶民の中から出てくるものかもしれない。「臆病風」は近世から吹き始めるようだ。これらと似た「風」を一つ紹介して稿を終えたい。一休の『自戒集』に

御僧ナウく、比丘尼風ガフイテキタ、イレマウセ  
く、ヲクノ寮ヘイレマウセ

という小歌が記されている。僧侶の墮落への批判が厳しい。

#### 注

1. 友久武文・山内洋一郎校注、新日本古典文学大系『田植草紙、他』一九九七・一二、岩波書店。
2. 連歌貴重文献集成、第一集、影印。解説金子金治郎・山内洋一郎。昭和五十三年・六月、勉誠社。
3. 酒井憲二編著『甲陽軍鑑大成』全四巻。本篇は、底本土井忠生博士蔵、寛文延宝頃写本。第一巻、本文篇上は、一九九四年四月、汲古書院。
4. 『千句連歌の統計』は、宗祇関係、千句連歌七種総索引（山内編）による統計を指す。山内洋一郎『連歌語彙の研究』（一九九五・二、和泉書院）Ⅱ。四〇ページの第五表参照。

追記 本論文は、俳誌『木の実』第四十六巻第七号（平成三年七月）に掲載した「中世語さまざま 一」に注を施し、訂

正を少しく加えたものである。学界に知られない文章であつたが、ここに掲載する機会を得た。旧任校の恩情に感謝する次第である。

（やまうち よういちろう

広島女学院大学教授  
奈良教育大学名誉教授）